特集2 日本列島のなかの腰岳黒曜石原産地

●問合先　生涯学習課文化財係（☎㉒1262）

腰岳は、九州随一の黒曜石の原産地として知られています。

3万年以上も前に、私たちの祖先がこの黒く光る石を見いだし、石器の材料として使い始めました。いつしかこの黒曜石は、周囲の人々に知れ渡り、縄文時代には九州を中心として、西日本、琉球列島、朝鮮半島南部まで運ばれていました。

腰岳では近年、『腰岳黒曜石原産地研究グループ（代表越知睦和（おちよしかず）さん）』による地質や岩石、考古学調査が行われ、黒曜石の生成過程や人類活動の具体的な様子が明らかになってきています。

誇れる郷土の文化財である黒曜石、そして黒曜石原産地の腰岳について、紹介します。

↑腰岳の黒曜石で作られたナイフ形石器

↑腰岳黒曜石の原石

【黒曜石ってなに】

黒曜石は、正確には『黒曜岩』といいます。火山岩の一種で、溶岩や火山から出てくる噴出物が、急激に冷えて固まるときにできるガラス質の部分、つまり、自然が生んだ天然のガラスです。

黒曜石は、ナイフのように鋭く割れます。また、均質で不純物をあまり含んでいないため、思いどおりに割ることができます。このことが、石の道具を主に使った先史時代の人たちに、好まれた大きな理由でしょう。

【黒曜石の山、腰岳】

腰岳を登ると、黒曜石の原石があちこちに落ちています。黒曜石は、どこでできたのでしょう。

答えは、腰岳の山頂（標高487・7㍍）から、やや下った420～400㍍の地点。ここに、黒曜石のできたところがあり、原石が直接露出している場所（露頭（ろとう））もあります。また、標高によって原石の形状に違いがみられ、露頭付近の標高が高い場所では角ばっていて、標高の低いふもと付近では、丸みがあります。

【日本列島に最初にやってきた人々と腰岳の黒曜石】

アフリカで生まれた現生人類（新人）は、およそ4万年前、はるかなる旅路を経て日本列島にやってきました。実は、最初にやってきた人類が、どういうルートをたどってきたのかは、いまだに謎に包まれたまま。

最初にやってきた人々は、生き抜くために食料を追い求め、それを得るために、さまざまな道具を作り出しました。その過程で見つけたもの、それが黒曜石。驚くべきことに、3万5千年前頃までには、日本列島のほぼすべての黒曜石の産地を見つけ出していたとみられています。

黒曜石は、主にやり先やナイフとして利用されました。腰岳の黒曜石で作られた石器は、2万5千年前頃には鹿児島県や山口県まで運ばれ、1万5千年前には、九州だけでなく、東は広島県、北は朝鮮半島にまで渡っています。

旧石器時代に、これほど遠くまで広がった石材は、日本でもごくわずか。腰岳の黒曜石は、当時の人々からとても好まれ、そして、大切に使われていました。

↑腰岳の黒曜石で作られた石器

長崎県雲仙市龍王遺跡から出土した槍先

腰岳３万年！悠久のロマン

【腰岳研究の道のり】

腰岳で黒曜石が産出していることがわかったのは、意外に新しく、戦後になってからのことです。もちろん、それまでにも地元の人たちには、黒い石のことは知られており、『烏（からす）ん枕』と呼ばれ、親しまれていました。

それが、昭和25年に黒曜石であると学界で発表されると、考古学者の注目を集めるようになりました。

そして、昭和36年には、腰岳山腹と山麓の遺跡（平沢良（ひらざわら）遺跡と鈴桶（すずおけ）遺跡）が明治大学によって発掘調査され、腰岳が旧石器時代から縄文時代にかけて、石器の一大生産工場であったことが初めてわかったのです。

それから60年後の今、地質学、岩石学、考古学の専門家が集まって、『腰岳黒曜石原産地研究グループ』として、腰岳の調査を続けています。

平成26年から、延べ10回の現地調査と5回の整理作業による研究を重ねて、腰岳の歴史的価値を市民に伝えるまでに至りました。

【シンポジウム開催】

10月9日・10日、『腰岳黒曜石原産地研究グループ』と市教育委員会は、調査で明らかになったことを報告し、市民に腰岳の魅力を伝えるため、市民図書館でシンポジウム『日本列島のなかの腰岳黒曜石原産地』を開催しました。

シンポジウムの中であいさつした深浦弘信市長は、「腰岳は伊万里の宝。この宝をどのように守っていき、どう活用していくかを市民の皆さんとともに、考えていきたい」と述べました。

この2日間で、腰岳と日本列島の他の黒曜石原産地とを比較することで、黒曜石原産地としての腰岳の特徴が、明らかにされました。

↑『腰岳黒曜石原産地研究グループ』の皆さん

10月10日、シンポジウムの様子

市歴史民俗資料館での腰岳黒曜石の展示

市歴史民俗資料館では、11月14日（日）まで、腰岳の黒曜石を展示しています。
※月曜日は休館

【腰岳、その後】

稲作が始まった弥生時代に入っても、腰岳の黒曜石は依然として、重要な石器の材料として使われ続けました。

ところが、弥生時代の中頃以降、大陸から入ってきた銅や鉄などの新しい材料を手に入れた人々は、徐々に石器を手放しはじめました。

そして、弥生時代の終わり頃（卑弥呼の時代）に、金属の道具が石器の役割にとって替わるのと時を同じくして、腰岳の黒曜石は使われなくなり、その役割を終えたのです。

【研究グループ　芝康次郎さんの言葉】

「普段何気なく見ている腰岳の黒曜石が、実は日本の歴史に欠かせない石だった、といえば、あなたは大げさに感じるかもしれません。でもこれは、本当の話なのです」

↑シンポジウムで講演を行う研究グループの芝さん

【腰岳の現在、そして未来へ】

現在、腰岳には、高校の演習林や修道院があり、遠足地や憩いの場として、市民に親しまれています。

先人が残し、市民に愛されてきた、この誇るべき山のことを私たちはよく知り、子孫に伝えていく責務があります。

黒曜石原産地遺跡としての腰岳の持つ価値については、『腰岳黒曜石原産地研究グループ』が継続的に調査を行っています。

今後、市教育委員会としては、この調査の成果を基に、多角的な調査を行い、遺跡の保存を進めたいと考えています。また、市の観光資源として、その魅力を発信していきたいと思っています。

そのためには、市民皆さんの協力が必要です。この歴史あふれる腰岳を、ともに未来に伝えていきましょう。

教育委員会
生涯学習課係
文化財
船井向洋（こうよう）

※資料などは、シンポジウムにあわせて刊行された書物『腰岳－悠久の歴史を紡ぐ黒曜石の山－』から引用しています。